様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　20 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530641

研究課題名（和文）　自殺予防教育の一環としての幼年版 Death Education Program

研究課題名（英文）　Childhood version of Death Education Program as part of suicide prevention education

研究代表者

牧　正興（MAKI SEIKOH）

福岡女学院大学・人間関係学部・教授

研究者番号：30141758

研究成果の概要（和文）：幼児(３～5 歳)への Death Study の実施は、当初考えられていた消極的対応から、積極的対応への必然性が確かめられた。幼児の死の概念はまだ曖昧で、さまざまな指標によってその裏づけを行ってみた。その結果、保育所での生活や日常生活での行動変化は少なからず確認することができた。これらのことから、概念形成が曖昧な時期がゆえに死に対する不安や恐怖心がなく、身近なものとして受け入れることができ、死への正しい認識へと導かれることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：It was confirmed that negative thought correspondence, which was thought from the beginning, has been changed to positive one by the implementation of Children (3 to 5 years old) Death Study. The concept of death among children is still vague. Therefore, the evidence of it was investigated by the various indicators. As a result, behavioral changes life in the nursery and the daily life activities were observed a little. These results suggest that children can accept death as the most familiar because they do not feel the anxiety and fear of death during ambiguous concept formation periods. We confirmed that they led to the appreciation of death.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：Death Study、幼児期、認知発達、感情発達、死の概念形成、アニミズム

１．研究開始当初の背景

近年、命そのものを軽視しているような青少年の事件や自らの命を自らで絶つ若年層の問題が表面化してきている。現在、学校教育（保育）現場では，子どもたちに対して生命尊重等の教育を導入していることが報告されているが、それらの教育内容は、“生きる”ことの大切さを伝え、間接的に“死”を

意識させることによって、さらに“生きる”ことを重みづけしているものが中心である。“死”について直接的に言及しないこれらの教育は、本邦の過去の歴史上の諸問題と文化的背景、さらには宗教と教育との関係や家族構造の変化など、複雑な問題が関係しているおり（中央教育審議会，2003)、慎重を期す問題として扱われている。

本邦においては、“死”に関するタブー化が進行した時期があり、その時期は第二次世界大戦後 50 年あまりの間であると言われている（澤井，2000)。そのタブー化の中で制定された学校教育法体系の中で、現状の“死”に関する内容を暗に含みながら触れることができない教育が実施されていることは社会背景上理解可能である。しかしながら、“生きる”ことをのみを強調した生命尊重教育を行っているにも関わらず頻発する青少年の事件のことを考えると、現在の生命尊重教育だけでは限界があることが考えられる。生と死が隣り合わせにあることや表裏一体であることなどの一次元性について、正しく理解しないまま混沌とした青年期を迎えている、本邦の青少年の現状が示唆される。

丹下（2004）によると、中学生の間は全体として学年が上がるにつれて次第に死を恐れる気持ちが薄れるとともに、死を苦難からの解放と見なす考えを否定しなくなることが指摘されている。さらに、困難な状況下でも最後まで生き続けようという意識が弱まったり、身体のみの生に執着しない気持ちが強まるという形で、生に対する積極的な態度も減少することも明らかになっている。そしてその態度は高校生になってもほとんど変化がない。これらの結果は、中学生においてすでに現実の生活からの解放という形で死をとらえたり、身体とは別の生の存在を考えており、中学生や高校生における Death Education の難しさや導入時期の遅さについて示している。

児童期に関する研究では、子どもの死の概念の理解や死別体験の与える影響についての研究が多い（Speece & Brent，1984；岡田，1998；筒井，1998；藤井2002）。仲村（1994）によると、児童期あたりから死の現実的意味である普遍性、体の機能の停止、非可逆性を理解するようになる。つまり、誰でもいつかは死ぬし、死によって体の機能は停止するし、再び生き返ることはできないことを理解する。そしてこれらの自覚から死は自分にも起こり得ると考えるようになり、それはやがて死後の世界への想像、願望、希望が膨らみはじめると思われる。特に児童期のなかで、年齢が高くなるにつれて人間は死んだらまた生まれかわるという「生まれかわり思想」の増加が目立ったことを明らかにしている。この結果は、ピアジェの認知発達と関連して、死の概念も児童期に発達していくことを示しており、死を理解した後には死への憧れなるものが出てくることを示唆している。

これらのことから、Death Education Programの導入に関して、死の概念を理解する前の子どもたちへのアプローチも視野に入れて検討していく必要があると思われる。アメリカ国立精神保健研究所の報告によると、子どもに「死」を教えることは重要であることが結論づけられおり、やはり年少の子どもたちへの「死」に関する教育を模索していることが伺える。

２．研究の目的

本研究では、Death Education Program（死の意味と生命の尊厳を伝えるための“生と死に対する準備教育プログラム”）の幼年版を作成し、死に対して偏った恐怖心を持たない幼年期に間接的に生と死について触れることによって、適切な生と死に対するイメージ

を持つことを目標とし、児童期以降の自殺予防教育の一環として検討していくことを目的とする。

これまで幼児教育現場を中心とした予備的調査の中で、そのほとんどが Death Education に関する必要性を感じているものの、実践上の具体的方略については全く手立てがないこと（坂田・牧，2003）、また国内外においても小学校以上を対象とした先行研究の成果は多々見られるが、幼児期に関する研究的見解は皆無に等しい。また、西欧諸国においては宗教的視点からのアプローチによる介入が中心となっており、それらの公教育上、特定宗教の関与を認めない我が国での活用は困難である。したがって、宗教的介入を伴わない Death Education Program の確立が本邦では必要となる。そこで本研究では、まず幼児期における死の概念形成のプロセスを医学・心理学双方から追求し明確にし、それらの結果をもとに、発達的にどの時期に、どのような内容を、どのような形で提示しプログラミングすることがより効果的であるかを詳細に検討していく。

なお、本テーマに関する先行研究の多くは、小学校以上の児童を対象としたものや、病児の緩和ケアに関するものが中心となっている。そこで、死を意識し始める３、４歳の頃に幼児期の認知特性を踏まえ Death Education を行うことが最も自然で効果的であることと、それらの方法を具体的に提示し実践可能なものするという本研究は今までに類をみないものである。そして、その Death Education Program の実施後、維持効果を検証することによって、幼年期のプログラム実施が生や死に対する適切なイメージを与えることができるのか、そしてそれらが自殺予防教育の一翼を担うことができるのかを明らかにしようとするが本研究の特色・独創的なところである。

３．研究の方法

（１） 調査の手続き

①death study に使用する絵本の選定

death study には、絵本を用いて行った。絵本は幼児の遊びの１つである。武田（2006）は、絵本や紙芝居は、絵を手がかりとして色、形、におい、音、感触などを思い起こし、語りかけによって「ことば」と結びつけることが可能となるものとしている。また、竹中ら（2004）は、絵本を用いた紙芝居を用い、幼児における死の不動性、不偏性、不可逆性についての各年齢の時期について明らかにしている。これらの研究成果をもとに、death study に絵本の読み聞かせを行うことにした。

②収集した絵本は、先行研究や日本児童図書出版協会が推薦する死に関する本を 32 冊収集した。絵本は、満岡ら（2003）のテーマの分類を参考に 6 グループ（息子・祖父母の死、家族の一員だった動物の死、擬人化された動物が主人公、めぐりめぐる永遠の命・輪廻をとく絵本、死の教育教材絵本）に KJ 法により分類した。

③絵本は、阪本（1977）の絵本の評価尺度に死をわかりやすく描き、表現されているという項目を加え、教員 1 名、院生 4 名、計 5 名によって 5 点満点で算出して選定した。

④その結果から、平均点 3.5 以上を基準に絵本を選出した。

（２）予備調査

各年齢の対象者に認知の測定及び death study の絵本の読み聞かせを行った。

①認知の測定では、Speece&Brent（1984）、宮本（1983）、岡田（1988、1990）に挙げられている質問項目を参考に、言葉の言い回しや資料が適切なものであるかについて調査し、以下の項目（Table.1）に決定した。

Table.1 認知測定の項目

①アニミズムの残存として「イヌ、ヌイグルミ、キ、ヒコウキ、ツクエ、カミナリ、ヒト、ロボット」の写真を見せながら、「生きているか、生きていないかについて回答させた。 ②生物・無生物の根拠として「生きているものと生きていないものの違い」について回答させた。 ③機能の停止（呼吸、感覚、思考、感情）は、「死んだ人も～をするか」について回答させた。 ④非可逆性は、「死んだ人は生き返ることができるか」について回答させた。 ⑤普遍性は、「自分もいつかは死ぬか」について回答させた。 ⑥死後感は、「死んだらどうなるか」について回答させた。

※所要時間は、5 分程度で、各項目の反応時間を計り対象者の発言を IC レコーダー(SONY ICD-B20)に記録をした。

②death study で用いる絵本への注意の持続時間や様子について調査した。対象は、各年齢（3 歳児、4 歳児、5 歳児）男児 1 名、女児 1 名に行い、IC レコーダーで記録をした。その結果、各年齢ともに 10 分前後の集中力であった。認知の測定におけるアニミズム要因として、音楽を聞く「コンポ」は意味が分からない幼児が多かったので削除した。また、「死はどんな感じがするか」という質問項目は、聞き方が抽象すぎるために削除した。

③実施手続きの流れ

実施前に、対象者全員（実験群、統制群）に認知の測定を行った。

調査に際して、実施前には著者を含め大学院生 4 名が対応し、1 名の対象者に対し、2 名がつき、質問をする者と記録をとる者に分かれて行った。実施後は、３名の大学院生が対応し、1 名の対象者につき、1 名が調査を行った。実施者は、事前に質問の聞き方や口調などを全員で確認して行った。

実験群は、death study による絵本(2 回目は修正版を使用)の読み聞かせを週に 1 度、計 12 回行った。実施場所は、保育室及び図書コーナーで 2 列になり、床に直接座って行う場合と、後ろの列の幼児は椅子に座り、前の列は座って行うときもあった。実施者は、同一大学院生すべての回行い、２～3 名の大学院生が記録をとった。

（３）分析方法

①death study を行う群（実験群：死に関する絵本の読み聞かせを行う）と death study を行わない群（統制群：死に関する絵本の読み聞かせを行わない）の実施前後の比較を行う。

②アニミズム要因（イヌ、ヌイグルミ、キ、ヒコウキ、ツクエ、カミナリ、ヒト、ロボット）、機能の停止（呼吸、感覚、思考、感情）、不可逆性、普遍性に関する認知については、2 要因混合計画の分散分析行う。

③生物・無生物の根拠、死後感についての比較を行う。

（４）対象者

①対象者の協力を依頼する園の選定は、特定の宗教教育がなされていないことを条件とした。当園は、0 歳から 6 歳までの保育である。

1 回目の対象児は、S 県の保育園児。3 歳、4 歳、5 歳の園児計 63 名。Death study 実施群（実験群）は 3 歳児 9 名、4 歳児 11 名、5 歳児 15 名であった。Death study 非実施群（統制群）は、3 歳児 6 名、4 歳児 8 名、5 歳児 14 名であった。

2 回目の対象児は、F 県の保育園児。3 歳、4 歳、5 歳の園児計 66 名。Death study 実施群は 3 歳児 10 名、4 歳児 10 名、5 歳児 10 名であった。非実施群は、3 歳児 10 名、4 歳児 10 名、5 歳児 10 名であった。

②実施群の抽出は、調査期間に在園している園児を対象に、実施者の指示のもと、担当保育士によってランダムに振り分けた。

（５）調査実施期間

1 回目：2007 年 8 月～12 月

2 回目：2008 年 10 月～12 月

（６）倫理的配慮

対象者の協力にあたっては、保育園の園長及び担当保育士に文書及び口頭によりデータの処理、プライバシーの保護を含めた調査趣旨の説明を行った。保護者に対しては、園の保護者会で口頭による同様の説明を行った。保護者には、death study の様子を写真とコメントを載せて配布した。調査は 1 日かけて行い、death study の時間以外は、子供たちと遊ぶ様子時間をもち、調査中も幼児の人権を最優先して対象者の様子を観察し、細心の注意を払った。また、保育士の協力を得て、幼児の様子について確認をした。得られたデータは、個人が特定されないよう配慮し、守秘に努めた。

４．研究成果

（１）他者評価（保育士より）

社会的スキル尺度における社会的スキル領域・問題行動領域において特に有意な差はなく、death study を行うことによって、直接、行動に影響を及ぼすことはなかった。しかし、death study を後の保育への聞き取りでは、「生き物が死んでいると保育者に頻繁に知らせるようになった」ということや「生き物を大切にしようとする姿が何人かに見られた」という報告を受け、幼児の行動に特別な影響は出なかったが、生き物に対して興味を持って接したり、考えるきっかけになったことが予測された。また、保育士の方も一緒に death study に参加していたが、全セッション終了後に「何でも素直に受け止めたり、聞き入れたり出来る年齢だからこそ、子どもにありのままを伝えていきたいと思った」ということや「確かにタブーとか積極的には伝えたいことではないと思っていたが、だからこそ生きているとは、命とはという話はもっとしていいと思った」といった意見を聞き、death study に参加する全員が命について考えるきっかけになっていることが考えられた。また、園児の保護者の死亡に際し、園児と一緒に葬式に出席するといった death study による保育士への影響として受け止められる対応の変化も伺われた。

（２）保護者の社会的スキル尺度

社会的スキル尺度を調査の前後で回収を行ったが、データ分析を行うだけの数には至らなかった。death study を実施するなかで、保護者からの意見や感想をもらったが、特に子どもの行動変容に繋がったという報告はなかった。しかし、death study を受けることで恐怖心や不安を抱いた報告はなかった。むしろ保護者が、バザーの収益金で death study の本を数冊購入したり、「一緒に考えていきたい」「具体的にはどのように伝えていけばよいのだろうか」といった質問も寄せられた。子どもへの death study を通して保護者へと影響が及び、大人自身が考えるきっかけにもなった。

（３）他者評価として、大学生にイメージ測定を行った結果、全体を通して子どもたちが活発になり、積極性等の側面からの有意な差が見られた。この結果は、実施者が death study の時間以外にも幼児と関わる時間を持ったことによって関係性が深められたことで、興味・思考が高まり、積極的に意見交換できたことがその要因と考えられた。

（４）以上の結果から、当初目的としていた幼年版Death studyプログラムの具体的作成にまでは至らなかったが、これらの実施にあたり、「寝た子を起こすな」的考え方はほとんど意味をなさないことが明らかとなった。幼児期は、まだ確実な死の概念形成に至っていないからこそ、正しい内容の刺激を積極的に与えなければならない。そのことがひいてはしっかりした概念形成へと導かれ、命の尊厳や将来的に出会うであろう危機場面での耐性づくりにも寄与できるものと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 中津濱瑠美、岸法子、坂田和子、牧正興、幼児期におけるDeath Studyの可能性２、福岡女学院大学大学院紀要（臨床心理学）、査読無、7巻、2010、21－27.

②岸法子、坂田和子、牧正興、幼児期における Death Study の可能性について、福岡女学院大学大学院紀要（臨床心理学）、査読無、6巻、2009、61-68.

〔学会発表〕（計７件）

① 牧正興、中津濱瑠美、岸法子、坂田和子、幼児期における Death Study の可能性について(4)、日本心理学会第73回大会 2009年8月26日～28日　立命館大学

② 坂田和子、中津濱瑠美、岸法子、牧正興、幼児期における Death Study の可能性について(5)－生物と無生物の理解についての発達的検討－、日本心理学会第 73 回大会 2009年8月26日～28日　立命館大学

③ 中津濱瑠美、岸法子、坂田和子、牧正興、幼児期におけるDeath Studyの可能性について(6)－感情理解の発達を中心として－、日本心理学会第73回大会　2009年8月26日～28日　立命館大学

④ 牧正興、岸法子、中津濱瑠美、坂田和子、幼児期におけるDeath Studyの可能性について(1)、日本心理学会第72回大会　2008年9月19日～21日　北海道大学

⑤ 坂田和子、岸法子、中津濱瑠美、牧正興、幼児期における Death Study の可能性について(2)－死の概念の発達的検討－、日本心理学会第 72 回大会　2008 年 9 月 19 日～21 日　北海道大学

⑥ 岸法子、中津濱瑠美、坂田和子、牧正興、幼児期における Death Study の可能性について(3)－提示材料からの検討－、日本心理学会第 72 回大会　2008 年 9 月 19 日～21 日　北海道大学

⑦ 岸法子、坂田和子、牧正興、幼児への death study－認知過程の変容と予防的介入の取り組み－、九州心理学会第 68 回大会　2007 年 11 月 10 日　大分大学

６．研究組織

(1)研究代表者

牧　正興（MAKI SEIKOH）
福岡女学院大学・人間関係学部・教授
研究者番号：30141758

(2)研究分担者

坂田　和子（SAKATA KAZUKO）
福岡女学院大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：50321344

佐藤　武（SATO TAKESHI）
佐賀大学・保健管理センター・教授
研究者番号：30178751

(3)研究協力者

岸　法子（春日市子育て支援センター）
（福岡女学院大学大学院人文科学研究科）
中津濱　瑠美（医療法人 多布施ｸﾘﾆｯｸ）
（福岡女学院大学大学院人文科学研究科）